

派遣者番号	R3K02	氏名	高杉 芳恵
研究主題 —副主題—	教科指導を通じた社会情動的スキルの育成 —中学校英語における「話すこと [やり取り]」の指導を通して—		
派遣先	玉川大学 教職大学院	担当教官	西村 秀之
所属	北区立浮間中学校	所属長	奥村 宏

キーワード：社会情動的スキル 非認知能力 学びに向かう力 コミュニケーションスキル

## 1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

本研究の目的は、中学校における教科指導の中で、社会情動的スキルの育成・向上を図ることである。

「非認知能力」とも言われる社会情動的スキルは、目標の達成、他者との協働、情動のコントロールなどに関するスキル等を指し、OECD (2015) は、社会情動的スキルを「学びに向かう力」そのものであると定義している。グローバル化が進み、多様な価値観が存在する現代の社会において、他者との対話を通じ合意形成を図り、予測困難な時代を生きていくためには、社会情動的スキルが重要な役割を担うとされる。

また、中学校学習指導要領 (平成29年3月告示) においては、生徒に身に付けさせたい力として、「学びに向かう力、人間性等」の涵養が挙げられており、日本の教育において社会情動的スキルの育成が重要な教育課題の一つであることを示している。

一方で、小泉 (2015) は、現代社会における社会性育成の困難さを主張しており、「人間関係能力は、従来は日常生活の中で自然に身に付いていたのに、現在はそれを意図的、計画的に育てる必要がある」と述べ、集団生活の場である学校生活において社会性と情動の学習 (Social and Emotional Learning : SEL) を行う必要性を述べている。

そこで、本研究では、中学校における教育活動の中で最も多くの時間を占める教科学習の授業において社会情動的スキルを育むことを目的とする。「見えない学力」と言われる社会情動的スキルは、短期間で育成・向上させることは困難であり、日々の生活におけるさまざまな経験、社会体験を通して、長い期間を経て高まっていくスキルであることが多くの先行研究により明らかとなっている。その特性を考慮し、「ターゲットとなるスキルを絞って授業を行うことにより、教科指導において社会情動的スキルの部分的な向上を図ることは可能である」との研究仮説を立て、中学校英語科授業における社会情動的スキルの育成方法を研究した。

## 2 研究の方法と内容

### (1) 研究の方法

教科指導における社会情動的スキルを育成する授業デザインを作成するにあたって、小泉 (2011) が日本の中学生向けに開発した社会性

と情動の学習 (SEL-8S) プログラムを参考とした。

従来の SEL-8S プログラムでは、年間行事や生徒の実態に沿って扱う社会的能力を選定し、「①導入・説明、②モデリング、③ロールプレイ、④振り返り・まとめ」という流れで、主に道徳や学級活動等で行われるケースが多い。本研究では、SEL-8S の学習プログラムを取り入れながら、教科指導において、学習活動の中で社会的能力を育成する授業デザインを作成した。

表1 SEL-8S 学習プログラムで育成を図る社会的能力 (小泉・山田、2011)

分類	社会的能力
基礎的 社会的能力	自己への気づき
	他者への気づき
	自己のコントロール
	対人関係
応用的 社会的能力	責任ある意思決定
	生活上の問題防止のスキル
	人生の重要事態に対処する能力
	積極的・貢献的な奉仕活動

表1に挙げられる八つの社会的能力のうち、英語授業における「話すこと [やり取り]」の指導に取り入れることが比較的容易と考えられる「対人関係能力」、「自己のコントロール」、「他者への気づき」などの視点を取り入れ、単元指導計画を作成し、検証授業を行った。

対象は都内公立中学校第1学年166名、全5学級で、令和3年7月8日から16日までの2週間にわたり各クラス3回の検証授業を行った。そして、生徒の変容を分析するため「中学生用SEL-8S基礎尺度Ⅱ」 (小泉・米山、2015) 及び「中学生用コミュニケーション基礎スキル尺度」 (東海林他、2012) を授業前後に実施し、その変化を測定した。また、数値に表れない変化を授業内ワークシートの振り返り欄、アンケートの自由記述欄から分析し、教科の学習を通じた社会情動的スキルの育成の可能性について考察した。

## (2) 研究の内容

中学校外国語科“Stage Activity 1 All about Me Poster”という単元を用いて授業を行った。これまでの先行研究およびSEL実践例から、教科授業を通して社会情動的スキルの育成を行う上での指導の留意点を以下のように設定し、検証授業を行った。

ア 教員自らが表情・ジェスチャー、アイコンタクトなどの非言語的要素を取り入れて生徒とインタラクション（やり取り）を行い、授業全体を通してコミュニケーションのモデル提示をする。

イ 生徒の発言・行動を否定する言動をせず、肯定的フィードバックをする。

ウ 挙手や発言などを強制せず、生徒の自発的な取組や主体性を重視する。

エ 教員はファシリテーターとして、生徒主体の学びや発話を促進する。

## 3 研究の結果

### (1) 量的研究結果

授業前後に行った「中学生用 SEL-8S 基礎尺度Ⅱ」を因子別に分類し、1要因参加者内計画を用いて分散分析を行った。その結果、8因子のうち1因子（「責任ある意思決定」）において有意差が認められた。（表2）

表2 中学生用SEL-8S基礎尺度Ⅱ分散分析結果  
（因子4：責任ある意思決定）

事前		事後		F 値	効果量 f
平均	S.D.	平均	S.D.		
9.15	2.06	9.44	2.20	4.93 *	0.18

N=145 p < .10\* p < .05\*\* p < .01

また、授業においてターゲットスキルとした対人関係能力を含むコミュニケーション能力については、意思伝達、他者理解スキルの双方において有意差が認められた。（表3）

表3 中学生用コミュニケーション基礎尺度（BCS）  
因子別分散分析結果

因子	事前		事後		F 値	効果量 f
	平均	S.D.	平均	S.D.		
F1	23.30	5.05	24.89	4.92	15.96 **	0.32
F2	11.32	3.16	12.16	3.16	11.48 **	0.27

N=156 p < .10\* p < .05\*\* p < .01

F1：意思伝達スキル F2：他者理解スキル

## (2) 質的分析結果

授業前後の生徒の質問用紙の記述を比較すると、ペアやグループでの言語活動を通し、話すスキルや聞くスキルを体験的に学んだことにより、コミュニケーションに対する自信を高めたことが示唆された。（表4）

表4 授業前と授業後のコミュニケーションに関する生徒の記述（抜粋）

	授業前	授業後
生徒A	人と話すと自信がなくなる。	表情やジェスチャーをつけるとすぐ相手が自分のことを分かりやすくなるんだなど分かりました。
生徒B	初対面の人 が苦手。	聞く時にあいづちをしているとよく伝わっていることが分かった。

## 4 研究の考察

社会情動的スキル全体を因る「中学生用 SEL-8S 基礎尺度Ⅱ」において1因子のみ有意差が認められたことに対し、授業でターゲットスキルとしたコミュニケーション力を因る「中学生用コミュニケーション基礎尺度」においては両因子、全項目において有意差が生じた。この結果から、「教科指導において社会情動的スキルの部分的な向上を図ることは可能である」という仮説は証明されたといえる。また、今回の結果を受け、より効果的に教科指導内において社会情動的スキルを向上させる方法として、「他教科との連携による SEL 実践」が挙げられる。教科の内容や特性に合わせ八つの社会性能力の中からターゲットスキルを選定し授業実践を重ねることで、より広範な社会情動的スキルの育成が期待できる。そのうえで、本研究の検証授業において効果が見られた指導方法及び分析から、他教科においても取り入れることが可能な教員の指導行動を以下のように整理した

- (1) 生徒の発言、行動を否定せず、能動的に聞く等、他者尊重の姿勢を、授業全体を通して示す。
- (2) 肯定的フィードバックを心掛け、生徒のささいな変化、向上を取り上げる。
- (3) 教師は生徒の主体的な発言、活動を促すファシリテーターとして機能するよう努める。
- (4) 生徒の心理的安全性の確保に努める。

## 5 今後の展望

社会情動的スキルを含む「学びに向かう力、人間性等」を涵養することは教育現場における重要課題の一つである。本研究で得られた知見を、教科指導をはじめ教育活動全体に取り入れ、主体的に学習に取り組む態度や豊かな人間性を育む研究を今後も続けていく。